

40年を
彩った名作を
最新機種で体験

2

AKIRA × PI

極上の爆音が心に迫る。 AVはここまで来たんだ



ピエガCoax Gen2シリーズ5.1chシステムで
『AKIRA』ほかの傑作サラウンド作品群を堪能

鳥居一豊



PIEGA

Speaker System

PIEGA Coax 411

¥1,650,000 (ベア、ブラック) 税込

●型式:3ウェイ2スピーカー・バスレフ型●使用ユニット:リボン型トワイター/ミッドレンジ・同軸、160mmコーン型ウーファー●出力音圧レベル:90dB/W/m●クロスオーバー周波数:450Hz、3.5kHz●インピーダンス:4Ω●寸法/質量:W210×H450×D310mm/25kg●カラリング:シルバー(¥1,540,000ベア税込)、ブラック(写真)、ホワイト(¥1,650,000ベア税込)●オプション:Stand 400(¥286,000ベア税込)●問合せ先:フューレンコーディネート ☎0120-004-884

Coax Center 211

¥1,078,000 (ブラック) 税込

●型式:3ウェイ3スピーカー・密閉型●使用ユニット:リボン型トワイター/ミッドレンジ・同軸、160mmコーン型ウーファー×2●出力音圧レベル:90dB/W/m●クロスオーバー周波数:450Hz、3.5kHz●インピーダンス:4Ω●寸法/質量:W620×H210×D310mm/21kg●カラリング:シルバー(¥968,000税込)、ブラック(写真)、ホワイト(¥1,078,000税込)



PS101

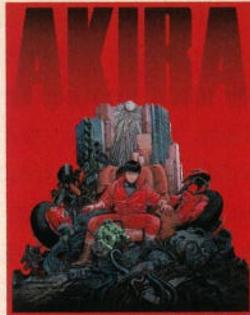
¥550,000 (シルバー) 税込

●型式:アンプ内蔵サブウーファー・バスレフ型●使用ユニット:220mmコーン型ウーファー×2●アンプ出力:300W(ピーク)●寸法/質量:W360×H420×D400mm/25kg●カラリング:シルバー(写真)、ブラック(¥550,000税込/受注販売)、ホワイト(¥605,000税込/受注販売)

『AKIRA』

●1988年作品●劇場公開:日本・1988年7月16日
【キャスト】岩田光央、佐々木望、小山栄美、石田太郎、玄田哲章、鈴木瑞穂、中村龍彦、伊藤福恵、神藤一弘
【スタッフ】原作・監督、キャラクターデザイン:大友克洋、脚本:大友克洋・橋本以蔵、作曲・指揮:山城祥二、美術:水谷利春、音響:明田川進、録音:瀬川徹夫、撮影:三澤勝治、編集:瀬山武司

©1988 マッシュルーム/アキラ製作委員会



UHDブルーレイ 『AKIRA 4Kリマスターセット』

(バンダイナムコフィルムワークス
BCQA-0009) ¥10,780 税込

1988年に「200カット完全リメイク」の国際映画祭参加版LDが、1993年には、スペシャルコレクションがCAV完全静止画収録の3枚6面仕様でリリース。2001年に劇場公開版をドルビーデジタルでリミックスした5.1ch音声とオリジナル4.0ch音声収録したDVDが、翌2002年にはDTS Sound Edition版DVDがリリースされた。

2009年には192kHz/24ビット/ドルビーデジタルHD5.1ch音声を、音楽を担当した芸人山城組の山城祥二こと大橋力氏が提唱する「ハイパーソニック・エフェクト」として収録したBDがリリース。BDフォーマットでの最高スペックの音声を収録したパッケージとして話題になった。2020年には、35mmマスターポジフィルムを4Kスキャン&HDRリマスターしたUHDブルーレイ版がリリース。音声は、山城氏指揮のもと、192kHzのハイパーソニック・エフェクトを活用した新規音源を収録した

ピエガのCoax GEN2シリーズは、先行したCoax 411とCoax 611、そしてCoax 811と2chステレオの環境で聴いてきたが、いずれも素晴らしい音だと感じる一方で、ぜひこのスピーカーシリーズでサラウンド再生をしてみたいとも思っていた。

オールアルミニウム製キャビネットとC112+同軸リボン、UHQDウーファー、同パッシブドライバーも振動板はアルミニウム。一見、無機質な音がしそうだが、その音は極めて自然。緻密に空間を描く立体的な音の表現も特徴であり、サラウンド再生ならば絶対に異次元の音場を描いてくれるはず。センタースピーカーのCoax Center 211もシリーズに用意されているのだから、サラウンド再生デモをやってほしい。その機会があったらぜひ参加したいと輸入元にラブコールをしていたが、その思いが通じたのか、こうして本誌40周年記念企画で、ピエガCoax GEN2シリーズでのサラウンド再生を体験できる機会を得た。色恋に縁のない僕にしては珍しく、恋が成就した青年のように胸を高鳴らせながら視聴に臨んだ。

縦横無尽の立体音場が格別 『ゼロ・グラビティ』

今回使用するのは、Coax 411が4本とCoax Center 211が1本。サブウーファーはCoax GEN2シリーズ専用では用意されないの、ピエガの最上位機のPS101。これで5.1chを構成し、さらにHiVi視聴室常設のオーバーヘッドスピーカー・イクリプスTD508MK3を6本を組み合わせた5.1.6としている。AVセンターはマランツのAV10+AMP10。再生機器はパナソニックの4KレコーダーDMR-ZR1を用いた。

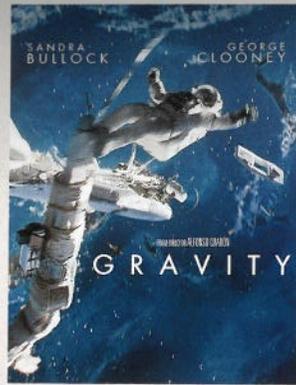
専用のStand400に設置されたCoax 411は細身のすっきりとした顔立ちで緩い弧を描いた流線形のフォルムが美しい。Coax 411とCoax Center 211は同じC112+同軸リボンドライバーと16cm UHQDウーファーを使用している(Coax Center 211はダブルウーファー仕様)。そのためCoax 411と顔付きやサイズ感が近く、システムとしてのまとまりもよい。

編集部からは最終的に紹介する作品の一つにしてほしい、との意向があったが、せっかくの機会だから、僕が愛するサラウンド作品をたっぷり堪能してみた。まずは、『ゼロ・

グラビティ』。本作はドルビーアトモス初期の傑作で、宇宙を舞台にしたSFサスペンス。リアルに再現された宇宙の描写が素晴らしいが、無重力空間という上も下もない感覚をドルビーアトモスの立体的な音場で伝えてくるサウンド設計が見事だ。冒頭の衛星軌道上での作業場面では、無線通話する地上やシャトルとの位置関係が、立体的なハーフドーム音場空間内に縦横無尽の音の定位で示されつつ、あらゆる場所からぐるりと移動しながら聴こえてくる。

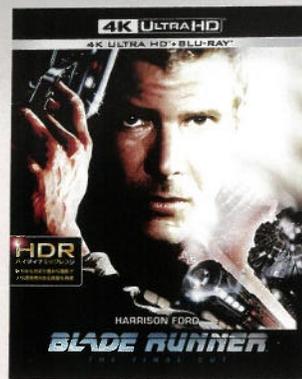
この空間描写は何度聴いても、いつも凄いと唸らされるが、今回のシステムは臨場感の高さという点で格別だ。引いた視点では、ごく低い暗騒音が空間を満たして、地球上とは異なる場所であることを連想させるし、映像がクローズアップすると、宇宙飛行士自身の呼吸音やヘルメット内の声の反響が、まるで自分が作業しているかのように感じられる。電動ドライバーの作動音も自分の身体に響くようだ。このシームレスな空間感と実体感のある音の感触。“こういう音を体感したかったんだ”と思えるサラウンド感だ。

ピエガCoax GEN2シリーズでのサラウンド再生は、音の定位とつながりの良さからくるシームレスな空間表現は実に見事なのだが、それが単に部屋中がスピーカーで埋め尽



BD
『ゼロ・グラビティ
スペシャル・エディション』

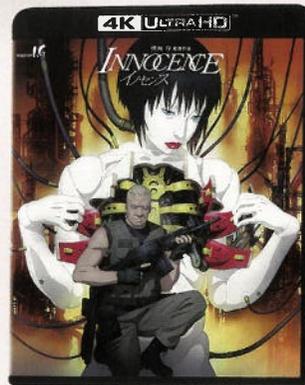
2013年公開の『ゼロ・グラビティ』は、3D映像とドルビーアトモス音声を十二分に活かした映画として金字塔ともいべき完成度を誇る作品で、第86回アカデミー賞で7部門を受賞した。BDはDTS-HDMA5.1ch音声仕様で2014年にリリース、その後、2015年には、ドルビーアトモス音声収録のスペシャル・エディションBDが限定版としてリリースされたが、現在は入手困難のようだ。なお、本作のアトモス音声は、この「スペシャル・エディション」BDか、Apple TVデジタル購入版のみに収録されている。UHDブルーレイは未リリース。



UHDブルーレイ
『ブレードランナー
ファイナル・カット』

(ワーナー 1000692665) ¥6,589税込

1982年公開、フィリップ・K・ディック原作、リドリー・スコット監督作品。カルト的な人気をもったSF映画の金字塔。LD時代から数々のパッケージメディアがリリースされ、映画に込められたメッセージ、こだわりを自宅で見つけ出す行為をAVファンの聖典というべき作品となった。DVDやBDで多数のバージョンが作られたが、2017年には『ファイナル・カット』（公開25周年の2007年に編集された117分版）が、UHDブルーレイ化。4K & HDRによる美麗映像のほか、音声もドルビーアトモスにリミックス収録された。



UHDブルーレイ
『イノセンス』

(ディズニー VWBS6700) ¥10,780税込

押井守監督の2004年作品。スカイウォーカーサウンドで制作された高品位立体音響が忘れがたい作品だ。2004年発売のDVDは、スタンダード版とリミテッド版の2種があり、前者にはドルビーデジタルサラウンドEX/ドルビーサラウンド2chが、後者にはドルビーデジタルサラウンドEX/DTS-ESという別フォーマットで収録されるというこだわりのリリースだった。2006年リリースのBDには、リニアPCM7.1ch、ドルビーデジタルEXとDTS-ESの6.1ch音声を取録。2018年のUHDブルーレイではDTS:X7.1.4ch音声を取めた。



くされている感じなのではなく、音場空間に深さというか奥行きがしっかり表現されているのだ。

僕はスクリーンとの兼ね合いでフロントスピーカーと中高域の高さを揃えるのが難しいセンタースピーカーの使用には実は懐疑的な立場をとっているが、今回のシステムでは、そうしたセンタースピーカーの設置の難しさが気にならないくらい、すべてのスピーカーが有機的に感じられた。このつながりの良さは本当に見事だった。

Coax GEN2シリーズの新しい同軸リボンユニットC112+は特殊コーティングを施した箔を裏面に貼付したほか、フロントプレートの厚みを3mmから4mmへとし、溝を設けてネオジム磁石を組み込む構造として強度を高めている。これらにより、微小な不要振動を排除したほか、歪み率もさらに低減させている。中心に位置するトゥイーター部にも磁石を配することができ、プッシュプル動作とさせるなど全面的に改良が加わっている。その結果、鮮明でありながら音の輪郭が強調されることのない、自然な音の感触を生み出し、しかも芯の通った力強さも伴う。

その成果が反映されたことで、宇宙空間の広大さ、無限の広がりを感じられるし、デブリ群と衝突のあと、宇宙を漂流しそうな場面での「底なしの穴に落ちていくような感覚」がたまらなく怖く感じられる。スペースステーショ

ン内の場面では、腕や足に当たって浮遊する小物のたてる音、無数の機器類のノイズの粒立ちがよく、それが狭い空間の圧迫感を高めることにつながる。空間の広さ、そして狭さの再現力は圧倒的だった。

空前のハイスペック版『AKIRA』の
異様な興奮を冷静かつ精密に表現

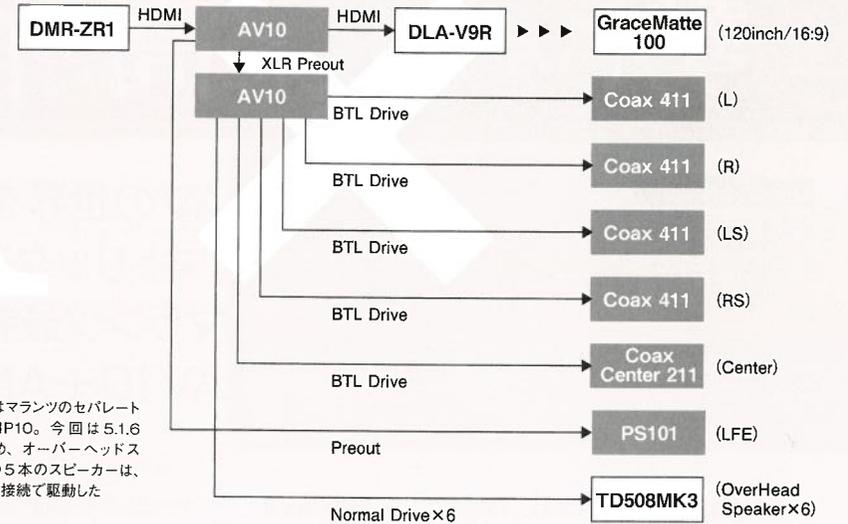
いよいよ『AKIRA』。超能力を題材としたSFアニメーションで、芸能山城組による音楽、暴走と破壊を繰り返す物語を192kHz/24ビットという前代未聞のスペックを誇るドルビーアトモス HD5.1chで収録している。

冒頭、暴走族たちの抗争シーンを見たが、電動バイクの走行音や転倒し炎上する様子、鉄パイプなどによる殴り合いなどが、祭り囃子のような音楽と絡み合っており、異様な興奮を描いている。この混沌とした騒音を、熱狂的であると同時につとめて冷静に再現する精密さで、Coax GEN2シリーズは表現する。

Coax 411は低音がしっかりと出るし、力強さもなかなかだ。同軸リボンユニットの中/高音は、低歪みで濁りなく、ハイスピーカーな感覚で放射されるが、低音もそれに負けず、遅れなくしっかりとレスポンスよくついてくる。ウーファーユニット自体は、オリジナルCoaxシリーズからは、チュー

▲ビエラの最新Coax GEN2シリーズは、優れた外装デザインだけではなく、ワイドレンジかつハイスピードサウンドが大きな特徴となっている。今回はシリーズ最小機（とはいえ高さ45cm、質量25kgと堂々たる体躯だが）のCoax 411を2組4本を揃えて、センターにCoax GEN2シリーズのCoax Center 211と、サブウーファーにビエラの22cmダブルウーファー搭載機PS101を用意して5.1chサラウンドシステムを構築した。視聴では、HiVi視聴室常設のイクリプスTD508MK3の3組6本も加えた、5.1.6構成として、ドルビーアトモス、DTS:Xの立体サラウンド音響作品を心ゆくまで味わった。センタースピーカーを用いたサラウンド再生では、センタースピーカーをどうやって配置するかが、システム全体の音場再現性を左右するため、今回は120インチスクリーンのその下端ギリギリまでセンタースピーカーの高さを持ち上げた状態としている。下手なセッティングでは「センタースピーカーがないほうがよい」ということになりかねないので、注意深く、入念な使いこなしが必要だ

接続図



ニングを変更した程度だというのが、エンクロージャーのブラーシングを改善し、強度を高めた結果なのか、力強く、しかもスピードの速い低音に仕上がっている。爆音と怒号がやんだときの静寂がしっかりと再現できる。極上の爆音だ。

このほか役得とばかり、『ブレードランナー：ファイナル・カット』や『イノセンス』なども見た。こうした歴史に残る名作は、本誌で度々取り上げられてきたが、Coax GEN2シ

リーズやマランツのセパレートAVセンター、パナソニックの4Kレコーダーなどを擁した最新システムで鑑賞、いや体験することで魅力、感動はさらに増した。サラウンドシステム、AV再生のための技術は、気がつけばこんなに高みまでたどり着いたんだな。ここまで作品、そして作り手のマインドに迫れるレベルになったんだな。そう考えると実に感慨深い取材だった。